

人びとが創るもうひとつのアジア

# ハリーナ

HALINA

no.42 2019年3月

【特集】

座談会

## 「支援者」たちと福島

——東日本大震災から8年が経過して





左がウッチョさん、右が筆者。

## イタリア・プーリア州ファザーノ市 ウッチョ・ドンナロイアさん(32歳) Uccio Donnaloia

〔写真・文〕  
関根佳恵／せきね・かえ  
愛知学院大学、  
国連食糧農業機関 (FAO)

2018年7月、南イタリアのプーリア州にあるウッチョさんの畑では、伝統品種レジーナ・トマトの収穫が最盛期を迎えていました。プーリア州は長靴の形をしたイタリアのかかとの部分に位置し、世界遺産のアルベロベッロやトマトとオリーブの生産で有名です。彼は代々続く家族農業の担い手で、家族15人でトマトや野菜、果樹などを生産をしています。機械や移民労働者には頼らず、家族と地元の方の雇用のみで、小規模で環境に配慮した農業を営むことを誇りにしています。

この地域では長年、レジーナ・トマトと綿花を混植し、綿花から紡いだ糸でトマトを房状につるして長期保存し、冬まで楽しんできました。しかし、トマトはより多収性の品種に、綿花も輸入品に置き換えられつつあります。地域の伝統品種と特徴的な農法を遺そうと、地元のスローフード協会がプレシディオという認定を取得し、認知度の向上と高付加価値化に成功しています。現在では、地元の市場やレストランで引き合いが増えているといいます。また、長期間保存することで、市況に左右されずに生産者が価格を提示できるため、この地域の加工用トマトの契約価格に比べて3～4倍の値がつくそうです。

ウッチョさんの畑は海岸沿いに広がる地方公園の中に立地しており、野鳥や水生生物と農業がつくりだす複雑な生態系が維持されている貴重な地域の中にあります。近年は、海、バードウォッチング、アグリツーリズム等を結び付けた地域の活性化が模索されており、国連食糧農業機関 (FAO) が認定する世界農業遺産の候補地にもなっています。■



トマトの収穫作業。



トマトの隣で栽培されている綿花。



15 年前、当時私が加入していた生活協同組合で「コーヒー好きに集まれ！」の呼びかけがあり、そこに集まった6名が「まめ福」の設立メンバーとなりました。消費者と生産者が直接会って話し合い、生産されたそのコーヒ

ー豆を、消費者が自ら焙煎することで「コーヒーの産直」の実現が可能にならないかという発案がきっかけです。そのために、自分たちで出資し、働き、経営の責任も担う「ワーカーズ・コレクティブ」という非営利市民事業で焙煎をおこなうというも

「まめ福」設立から5年後の2011年、長い抑圧の時代を経てアジアで取り残されてきたコーヒーの産地・東ティモールに、私は生まれて初めて降り立

てきました。赤い実が摘み取られ、「まめ福」に届くまでの長い長い道のりと、自由と尊厳を取り返すために犠牲になったたくさん

の尊い命が眠る山々に自生するコーヒーの木

## 道しるべ

白江祐子／しらえ・まさこ  
コーヒー焙煎ワーカーズ 珈琲工房まめ福 代表



RELAY ESSAY  
ぽこぽこ poco poco... 42

のでした。呼びかけの通り、ただコーヒーが好きで、焙煎まで

できました。焙煎までできるなんて素敵！ くらいの軽い気持ちで参加した私には、

それから随分と長い間「まめ福」の持つ大切な役割を自覚することはありませんでした。設立から4年が経ち、焙煎ができる嬉しさから事業運営という現実

|          |                                                                                                                                                                          |
|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Contents |                                                                                                                                                                          |
| 02       | 【ぽこぽこ 42】<br>道しるべ<br>◎白江祐子                                                                                                                                               |
| 03       | 【百姓 オブ ザ ワールド 05】<br>イタリア・プーリア州ファザーノ市<br>ウッチョ・ドンナロイアさん<br>〔写真・文〕 関根佳恵                                                                                                    |
| 04       | 【特集】<br>「座談会」<br>「支援者」たちと福島<br>——東日本大震災から8年が経過して<br>「支援」という名のもとで<br>◎疋田香澄<br>復興のかけ声の裏で<br>追いやられる「自主避難者」たち<br>◎瀬戸大作                                                       |
| 10       | 【COLUMN】<br>〔百姓の100章 ⑪〕<br>百姓を「子どもたちの憧れの仕事」ナンバーワンに！<br>——国連「家族農業の10年」「小農の権利宣言」が教科書に載る時代にしよう<br>◎斎藤博嗣&裕子<br>〔続 Have you ever seen the cinema ⑪〕<br>『ショコラ 君がいて、僕がいる』◎重政栄一郎 |
| 10       | 【Topics】<br>01-フィリピン 開発と超法規的殺害<br>◎勅使川原香世子                                                                                                                               |
| 12       | 【PtoP“最前線”】<br>韓国で発展、拡大する民衆交易<br>◎キム・ジェギュム、アン・ミンジ<br>スタッフが語る出張こぼれ話<br>カカオキタでの甘く幸福な時間◎義村浩司                                                                                |
| 14       | 【Voice from APLA partners】<br>From Negros, Philippines<br>KF-RC第8期研修生<br>元気に研修中です！                                                                                       |
| 15       | 事務局だより                                                                                                                                                                   |
| 16       | 【KITCHEN APLA】<br>カカオマフィン◎大久保ふみ                                                                                                                                          |

表紙のことば  
ベトナム南部の都市、ホーチミン市。ホーチミンの人びとは、朝でも夜でも昼でも皆バイクに乗っています。地元の方から聞いた話では、ベトナムの人たちは、じっとしていられず、夜特に行先がなくても、バイクを飛ばすらしい。本当でしょうか。  
表紙の布と出会ったのは、ホーチミンの観光名所の一つでもあるベンタイン市場。観光名所なだけあり、とても沢山の人がとて賑わっており、熱気が伝わってきました。ベンタイン市場は生活に関わる全ての物が手に入る場所です。肉、魚、衣料品、土産物、革製品、家電製品など。そしてその全てを混ぜたような匂いが私たちを迎えます。そこで働いている人びとは交渉中だったり、ご飯を食べていたり、なんとお昼寝していたり、携帯をいじっていたり、様々です。  
この布は、お昼寝中のお母さんを迷惑にも起こし、購入したものです。ここでの買ひものは、値切り交渉も楽しみの一つ。お母さんは寝起きにも関わらず、とても元気に私の上手くない値切り交渉に付き合ってくれたのを思い出します。(飯田華代)



**長谷部**◎日本国際ボランティアセンター（JVC）は、震災直後は宮城・気仙沼を重点的に、初期段階ではボランティアセンターの運営などを支援した。放射能の問題があったので、あの時期は国際協力団体で福島に入っている団体は少なく見落とされていた。それでいいのかという思いが団体内に強く、震災から数週間後、福島の調査を開始し、自分も含めて南相馬に入った。震災から3週間後くらいだったと記憶しているが、現場は依然として騒然としていて、物流も止まっていた。市役所に入ったりする人びとは荒々しい様子だった。話を聞くと、市役所の中に地元の商店街が担う災害FMがあることを知り、民謡教室を運営するご夫妻と市役所の方で毎日3回放送していた。慣れていた地元の皆さんが担っていたので、何かしらのサポートがあつていいのではないかと支援することになった。マスコミ出身者のJVCの元理事をすぐに現地へ派遣し、人材の確保、機材の拡充、伝える内容などソフト面を中心に支援を始めた。単に賠償や放射能のことを放送するだけではなく、南相馬の人たちの声をどう拾うかも考えた。災害FMから「ひばりFM」という名前に変えられ、地元ではよく聞かれるラジオとなり、2014年に市が調査した際には、約4割の人が聞

いてくれている結果がでた。途中から地元の人たちの主体性が高まり、JVCは側面支援へ切り替えた。

ラジオの取組みのほか、仮設住宅でのサロン活動の支援も実施した。地元の人たちは、元々住居環境がゆつたりしたところで人間関係も密に暮らしていた人たち。東京では普通だが狭いアパートのような仮設住宅に突然移り、家族が離れ離れになった人、慣れない生

合う限り、立ち位置をはっきりさせる必要があつた。すぐ原発をなくすことは難しいだろうが、なくしていくためには何ができるか。自然エネルギーの普及、それも上から下ではなく、地域の中で循環していくエネルギーの創出が望まれる。そうすると地域って何だろう、と考えざるを得なくなった。こうした問題意識を立てて今に至っている。具体的には、保養は11年以降、毎年続けてきた。受入も大変なので毎年どうする？ と言

いながら続けてきた。JANETに紹介してもらった「安心安全アクションin郡山（3a）」というグループと出会い（18年に解散、そこに資金協力をしながら、2年目以降は3a！を中心に郡山の子どもたちを呼んでいる。

農家さんたちへの支援は11年から12年にかけて実施し、伊達市の月館にある直売所に線量を測る機械を送った。お年寄りが元気を失っているなかで、野菜の線量を計って公表することで、消費者との信頼関係を築きたいという思いを

## 特集【座談会】 「支援者」たちと福島 ——東日本大震災から8年が経過して

東日本大震災から8年近く経ち、福島をめぐる状況にも変化が見られる。東京オリンピックを来年に控えて「復興」の聲が高まる一方、放射能汚染、避難、補償などをめぐる分断は深刻化しており、「当事者」を一枚岩的に語るのが難しくなっている。今回の座談会では、「当事者」ではなく「支援者」に話を聞くことで、少し違う角度から「3・11」から8年の福島を考えたい。3つの団体は、国際協力団体であり、「3・11」の後から継続的に福島への支援に関わってきたという点で共通している。国際協力の経験がどう生かされてきたのかについても話してもらった。（安藤）

**枝木美香**／えだき・みか（アーユス仏教国際協力ネットワーク事務局長）  
**長谷部貴俊**／はせべ・たかし（日本国際ボランティアセンター事務局長）  
**吉澤真満子**／よしざわ・まみこ（APLA事務局長）  
【ファシリテーター】**安藤文将**／あんどう・たけまさ（APLA評議員、武蔵大学教員）

座談会  
参加者  
五十音順

活で精神的にも健康面でも追いやられてしまった人も多いなかで、集会場での居場所づくりをおこなった。運営は「つながっぺ南相馬」後にNPO化という地元の人たちがやっていたが、JVCはサロンの運営や幹事者たちへのメンター的なサポートや運営支援をし、1年間で延べ2万人くらいが利用した。4カ所の仮設住宅で実施して、マッサージチェアを置いて、人が来やすいように工夫し、

ケ所村や祝島などに行ったりはしていた。でも「大変だね」といった字びで終わっていたのを深めていく必要があると感じるようになった。

**吉澤**◎震災後、APLAは津波被災地の支援は力量もノウハウもないので、議論は福島とどう関わっていくか、ということが中心だった。自分たちも当事者である問題、原発の問題は海外の人とも一緒に考えていかないといけない問題であるとか取り組むべきと

あった。私たちはアジアで農民と関わっている団体。日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）の時代からこれまで、日本の有機農業者がフィリピンに訪問してくれることも何度もあった。こうした経験から、福島に残ることを決

た農業者の人たちとつながれないかということになった。APLAの特徴として、プロジェクトありきではなく、地域の人とつながり、その人たちが必要としていることを一緒にやっていくスタンスを取っている。震災後も、まずは人と出会うために福島に入った。結

んで待つ時に話せるような環境を作っていた。歌謡教室、輪投げ、吹き矢などレクリエーションも企画し、場作りをしてきた。その後、ここ数年は仮設から団地に移られる方の側面支援もやっている。**安藤**◎FMに関わったのはコミュニティ形成の役割を想定したのか。**長谷部**◎途中からその点にこだわった。ラジオを聞いている人が結構いることが、統計が出る前から周りの聞き取りで分かっていたので、コミュニティ形成において、ラジオを通じての役割が大きいのではないかと意識してやってきた。

**枝木**◎アーユスはもととプロジェクトを実施するのではなく、現場で活動する団体への資金協力と情報発信、伝えていく活動をしているので、震災の時も当初はそれまで関係のあったNGOで東日本で活動を始めた団体に資金協力をした。また、11年の夏ぐらいまで、ボランティア派遣や炊き出し、ネットワークを使つてのマツチングをした。夏には、お寺のネットワークを生かしてできることを考えた結果、子どもたちの保養をすることになった。関係のある福島のお寺の子どもの会の子どもたちを山梨の理事のところに招いた。秋頃からその後の東日本への関わり方を議論し始めたが、長谷部さんがおっしゃったように福島への支援が手薄で、国際協力NGOセンタ

局は関係者の紹介で有農研の大内信一さんたちと出会い、一緒に何かできないかという話になった。すでに土壤検査や生産物の線量検査など多くの支援が入っていたが、APLAにできることがあれば、と現地へ通うことが始まった。

まずは、自分たちが置かれている現状や、これからどうしていくと「福島百年未来塾」という地域の人たちとの学びの場を作った。その過程で、やっぱり自分たちの地域でエネルギーを作りたいという想いが明確になっていった。有農研の皆さんは自分たちで助成金をもらって日本国内の事例の視察に行っていたが、海外の先駆的な取り組みを見るためにドイツへ行きたいという声が上がリ、海外のことなのでAPLAがコーディネートした。今では世代も交代されて若手が主体的に地域をどうつくっていくか考えるようになってい

る。また原発に頼らず、エネルギーを地域で自給するという夢を達成するために、まずはソーラーシェアリングの設置まで至った。7年経って夢を実現するためのスタート地点に立ち、それまでを一緒に経験してきた感じがある。

もう一つの活動は「バナナ募金」の取り組み。原発事故後に海外から送られてきた義援金をもとに福島の保育園や幼稚園にバラ

ー（JANIC）が出していた調査では、団体数も金額も宮城での活動が圧倒的に多く福島が少なかつたことに加えて、原発被災への責任をどこかに感じて、福島に焦点を当てた支援を考えるようになった。そこで福島に関わっている団体に連絡を取り、紹介してもらいながら現地を訪問したところ、いくつかの問題点が浮かび上がってきた。原発被災というのが人びとの暮らしをずたずたにしていくなを感じた。ここには改めてきちんと向き合っていく必要があると。関東にいる自分たちが使っていた電気ということだけではなく、日本中に54基の原発があり、どこで事故が起こってもおかしくないと考え、ボジションペーパーをまとめた。その中で、福島を中心に東日本大地震の被災地に関わることを明らかにし、中でも4つの点に関心を寄せ取り組むことを打ち出した。

第一に被曝の危険の緩和。特に子どもたちの健康をケアしていく必要があるという着眼点。第二に、福島に住むことを選択した人たちへのサポートとして、放射能被害に取り組む人々を応援することにした。そして事故を引き起こした原発とどう向き合うかも考え、国際協力団体としては少なくとも原発輸出には反対することにした。また原発についても、福島と向き

ゴンバナナを送ることから始まった。その後、継続的に国内で募金を集めてバナナを保育園に送り続けている。毎年何カ所か園を訪ねて様子を聞いたり、バナナの生産者が来日した時は一緒に訪問している。

現場に入る時に  
心がけてきたこと

**安藤**◎次に支援活動で心がけてきたことに話を移したい。原発や放射能汚染により大きな影響を受ける人びと（主に福島の住民）を「当事者」と規定すると、三団体は「支援者」という位置づけになるかと思う。その立ち位置として心がけてきたことはあるか。

**吉澤**◎外から入っていくのでいい風になれるようにとは考えていた。こちらが何かを決定するか、何かを持ち込むのではなく、そこで生活している人たちが何に直面し、何を考え、何をしたいかを中心に組み立てていく。現場の中だけだと人間関係とかで話せないことを外から私たちが行くことで話せたり、外から企画は持つていくが、一緒に学ぶことで見えてくることを共に探すとか。ネグロスや東ティモールでも、外とつながるメリットを生かしてどうやっていけるかを考えてのアプローチの仕方は変わらずやってきた。

**安藤**◎「風」になって外部から入



アーユスの山梨県富士吉田市での保養の様子。



る者には、どんな役割があるのか。  
**吉澤**〇外から持ち込みはするけど、地域を壊さないように、うまく循環させていくような役割を考える。あまり入り込みすぎてもダメだし、足りない関係性が作れない。過去にネグロスで大きなプロジェクトや資金を持って入って人間関係を壊してしまったというような経験が受け継がれている。

有農研が設置したソーラーシェアリングについては、農業法人が事業主になるのは非常に珍しいことらしい。一般的には融資を受けられないから。様々な人が関わって（アーユス、MIZUBI、パネルサポーターほか）、資金協力もしていることが融資を得る力になったと聞く。

**安藤**〇アーユスはどうか。

**枝木**〇原発に対する考え方は、福島で関わっている人たちでそれぞれ違っていたと思う。例えば、郡山の3a！のお母さんたちは福島産の野菜は食べなかった。学校給食に郡山産の野菜を使うとなった時に、公聴会を開くことを求める運動をしていた。一方で月舘と二本松の農家さんたちは安心して食べられる野菜を作れることに心を砕いていた。そういう意味で二枚舌のような自己矛盾を感じていた。とはいえ、アーユスの考えを押し付けることは違うと思うてはいたので、そのまま受け止めていた。

年寄りがほとんど。これまでの人生のうち、地元外にほぼ出たことがない人もいて、故郷に戻ることで安心する人もいる。そういうアイデンティティもある。ただ、そこで今後どう生きるのか。関東にいと福島の新ユースが伝わってこない。「東京はオリンピックだから建設業者はみんな東京行っちゃって、みんな福島のこと忘れてるべ」と仮設でおばあちゃんが笑いながら言っていた。その言葉は重い。そして、外の人と関わり続けていきたいというのは地元の関係者の人も言っている。

**吉澤**〇バナナ募金の届け先のある保育園の園長先生は、バナナが届くから「外の人が福島のことを忘れていない」というメッセージになっている」と話していた。

**長谷部**〇一見すると見えないところに、まだ原発事故の跡があるんだということが暮らしている人の話を聞くとわかる。

**枝木**〇保養をやっていて、2年くらい前から子どもの参加が減るだろう思っていた。11年に7歳だった子は高校生。しかし、今年は定員オーバーするくらい来た。前から来ている子の妹や弟もいるし、新規で親と一緒に震災直後に生まれた子が参加した。「不安の中にいた、福島に残り続けたことを受け入れるためにも、保養に通っていた」と、そこには残る選択をし



南相馬市、仮設住宅内の集会所での様子。

**安藤**〇考えを押し付けないというのは海外の経験から学んだのか。

**枝木**〇押し付けても現場にコミットしきれない。外部から来た自分たちが何かできるとは思っていない。ただ、郡山のお母さんたちも頭では分かっていたけれど気持ちが許さない。それは震災直後の行政の対応が悩みを抱えている人たちへ丁寧ではなかったから。それがゆえに信頼を置ききれない。不安を抱えながら「安全だ」と言われることに対する不信感が見えていた。その不信感を大切に受け止めることが重要だと思っていた。外部から「応援しますよ」ということは簡単だけれど、意識して一緒に考えていくことは大切だろうなと。

**長谷部**〇1つ目は、12年に原発は

た母親の罪悪感があった。安全に気をつけていても、尿検査したら放射性物質が検出された、甲状腺ガンの判定が芳しくなかったなど、保護者の精神的負担は減っていない。しかし、全体的に保養プログラムの数は減ってきているそうだ。

**吉澤**〇いま保育園・小学校低学年の子たちは事故があった後に生まれた子たち。外遊びが制限されてきたので体力的な問題や、ある意味親が一生懸命守ってきたということで精神的に弱い部分があると保育園の先生たちが話していた。福島のことなかったことにされてきてしまっているが、これから問題がでてくることも多いだろう。また、国際協力団体としては、こうした福島のことを海外に伝えき

JVCの目指す持続的な社会とは相いれないことを述べたポジションペーパーを作った際、地元の人びとの原発に対するいろいろな考えがあって、現場に入る担当者が悩んでしまった。言い訳に近いけれど、現場の複雑な思いと向き合うなかで、原発や社会のあり方について

議論を深めたかったが止まってしまった。海外でも経験することだが、現場を持っているからこそその政策提言のなかでストレートに言えないこともある。例えば、市民活動をバリバリやっているような浜通りのとある高校の先生が、生徒を東電関係に就職させることがエリートだと思ってやってきていた。原発関係で働いていた人も地元にいる。そのなかでどう声をあげていくか、今も乗り切れていないというところは正直ある。19年3月で福島の現地での活動は終わりにするが、この後どう向き合っていくか、まさにいま議論中。

2つ目は、海外で活動する際には違う文化への配慮を気にしながらやってきた。自分はアフガン、カンボジアを担当してきたが、各

れていない。福島の現状を海外にだけだけ伝えてこれたかという課題は大きい。

### これからの福島との関わりについて

**安藤**〇最後にここまでの活動の成果を振り返ってもらったうえで、今後、活動をどうしていくのかを話してほしい。

**長谷部**〇自分たちが外部者として関わり、その触媒的な役割となったのは大きかったと思う。物静かな方が多いので、そういう人たちの声を拾い、地域のやり方を配慮しながらも運営のアドバイスをしたのは大きかったかなと。

**枝木**〇JVCを支援してきたアーユスとして言えば、他の仮設住宅に比べて孤独死がなかったとか、

公営住宅に移った後にサロン活動が継続したとか、意識を持つ人たちが出てきたことは大きな成果だと思う。**安藤**〇成果が出たからこそ一区切りがつけられるということなのか。

**長谷部**〇移動先では資金的にも地元の人たちが自分たちでお金をとってこれるようになって

国で会議やプロジェクトの設定の仕方が違ったりする。福島の方から、東京の人は話すのが早いからと指摘されゆっくり話す、など配慮した。

**安藤**〇外国だと最初から「異文化」であると認識して行くが、国内だとそのことに気づかない。しかし、外国の異文化との交流が経験として生きてくるということか。

**長谷部**〇そういう点を配慮せずに軋轢を生んだ他の事例は聞いている。欧米的な感覚でやってしまった事例。「コミュニケーションって難しいですね」と東北に入ったスタッフが言っていた。

**安藤**〇外部から入ってきて、いかに関わるのか。その際に気をつけていることは何か。

**枝木**〇私たちの考え方が正しいと思ってるのではなく、現地の人たちの意見を聞きながら進めていくことだろうか。考えの変化にしても、時間の流れ方の違いを感じた。

**長谷部**〇JVCは下からの意見の底上げでやってきたので、その経験を「つながって南相馬」の皆さんに理解してもらうために振り返りの会合をゆっくり時間をかけてやってきた。また、東京事務所でおこなう仕事の形態とは異なり、お茶したり、一緒に輪投げなどで遊んだり、そういう時間の使い方をして、ぼそっと話してくれる言

たので、仮設の移動先では活動継続しなくてもよいとなった。今後については今まさに議論しており、プロジェクトで関わるのは19年3月で終わりと決定した。ただ、福島との関わりをゼロにしたいのかという思いで今後について考えていく。

**枝木**〇月舘に計量器を送ったところ、直売所の中で野菜にベクレルフリーシールを貼る動きが出たなど、地元の人たちが元気になったのには役立ったと思う。保養に関しては、安いレクレーションの場を提供しているだけかなと思ったこともあったが、切実に悩みを抱え続けてきたお母さんたちと出会えたことで、続ける方向で考えている。受け入れる山梨県富士吉田の人たちは夏休みの4日間を割いてくれて、家族にも負担だったと思うけれど、地域と地域が繋がったのは副次的によかったと思っている。受け入れに関わる人たちは福島で何が起こったか具体的に想像することは難しかったはず。二本松に関しては、色んな人が関わって、ソーラーシェアリングができたのはとても嬉しい。人が力をあわせれば発電もできることが証明された。

**安藤**〇ソーラーシェアリングの活動の成果は、発電量を見るとそんなに大きくはないかもしれないが、それは単なる生産だけに留まるも

葉の中の本音をくみとったりするように気を付けた。話が出てくるのを待っていた。

**安藤**〇一見すると無駄に見える手間と時間を積み重ねて初めて言葉を引き出せることがわかる。

### 8年経った今の状況変化をどう見るか

**安藤**〇枝木さんの指摘から、郡山のお母さんと地元農家、食べる人と作る人との間の分断の存在がよくわかった。だが、最近ではその分断が見えなくさせられているように感じる。復興のかけ声のなか、地域外の政治的力で分断がなかったことにされているのではない。8年経って感じる状況の変化、問題などを共有してほしい。

**枝木**〇浜通りはお金が如実に影響しているのかな、とは思う。賠償金の大小で人間関係や地域が分断されていると聞いたことがある。

**長谷部**〇その側面は大きい。ただ、自分は現段階でもどのくらいあるのか、正直わからない。実際避難解除された小高（南相馬市の南部）や浪江町に戻っている方は本当にわずか。小高は2割と聞く。スーパードもやっと12月（18年）にできた。もちろん放射能のこともあるし、生活インフラのことなど実際帰れるのかという問題もある。年齢の動態などは詳しく把握していないが、見たところ戻っているのはお

のではない。

**枝木**〇そこに関わることでできたのは幸せ。保養は福島から希望する声が聞こえる限りは続ける。今は大型バスを使っているが、それがマイクロスバスになってもいい。

大きな経済や枠組みで見てもいうと、地域で頑張ってもしかたないと考えがちだけど、二本松はいい事例で、地域という単位でものを見ていくというのを考えられる場を提供していきたい。それは国際協力団体にとってもいい学びになるのではない。支援という関わりもできるだろうし、地域について考える場を作っていきたい。

**吉澤**〇有農研がソーラーシェアリングを完成させるのに7年。様々な人たちが関わって完成したのが本場にうれしかった。おこがましい話だけれど、関わる途中で信一さんの息子さんの督（おとむ）さんが代表を引き継いで主体的にやられている姿を見て、人が変わっていくのを見た。色んなつながりの中ではこうやって変わっていくんだなと。ネグロスにも行き他の地域の農民とも出会ったことも大きかったと聞いた。別の若手メンバーも、農業の継続はできなかったけれど、その後福島の各地域での自然エネルギーの普及という別のミッションで貢献されている。そういう姿を見て、元気をもらったり学ばせてもらっている。大きな枠



組みからしたら小さなことだけれど、そういう若手がいるということ

とは何かしらにつながっていくと思う。APLAはJ CNCの時から「むらとまち」という言い方をして、世界も日本も構造的な課題は共通していると考えてきた。今後も二本松の人たちがどうやって

## 「支援」って何のまじで

疋田香澄／ひきた・かずみ  
リフレッシュサポート代表

「支援」という言葉は、一枚の大きな布のようだと思う。<sup>（※）</sup>ライナスの毛布のように誰かを外部から守ることもあれば、ベールとなりその中で発生した問題や権力関係を隠してしまうこともある。私も原発事故から8年間、「支援」という名のもとで様々な活動をおこなってきた。このエッセイでは、当事者や支援者の方々とともに、試行錯誤した軌跡をふり返っていく。

### 様々なニーズに応えるために

11年3月原発事故が起き、大量の放射性物質が広範囲に拡散した。私はその直後から、事故由来の追加被ばくを避けたい人向けにボランティアを始めた。当時まず焦点

いくつかを一緒に考えながらつながっていきたい。

安藤◎3団体の311後の活動を聞くと、人や地域をつくり出すことに関わっていて、豊かな成果があったのだということがわかった。また、3団体とも、現地の人を大事にするというスタンスを基本に

となったのは、そもそも支援が必要なのかということだった。事故後数年間は社会全体で同調圧力が高まり、追加被ばく受忍論が主流だったためだ。私は、ベネフィット（利益）なき被ばくを避けたい人びとの存在を可視化するために、「支援」という言葉を使った。そしていったん「支援」の旗を掲げると、相談が殺到するようになった。その9割以上が母親や妊娠中の女性だった。

被ばくは避けたいが避難はできない人びとから、「避難支援が存在するだけで、避難するべきだと責められているみたいだ」という意見も届いた。そうした人びとのニーズに応えるため、私は全国の支援者と連携を始めた。そして、

とで、福島などの保護者の方々、子どもたちと関わることが、本当にありがたいことだったのだと気づいた。大切な時期に一緒に時間を過ごせたことも。

「支援」という言葉は、一枚の大きな布のようだと思う。包んで誰かを守ったり、同時にその下で大切なことを隠してしまったりする。しかし、対等に座るための敷物として両者の下に敷けば、その名のもとで新しい関わりを生むものなのだと今は思う。■

（注）スヌーピーで有名な漫画「リナッツ」に出てくるライナスが、安心感を得るためにいつも持っている毛布のことである。安心毛布とも呼ばれる。

## 復興のかけ声の裏で 追いやられる「自主避難者」たち

瀬戸大作／せと・だいさく  
避難の協同センター 事務局長

福島原発事故からまもなく8年、国と福島県は20年東京オリンピック開催までに、ほぼ全ての避難者への支援を終了、福島の復興をアピールする一方で、避難者の困難を消し去ろうとしている。17年3月末、避難指示区域外（いわゆる自主的避難者）からの避難者1万2539世帯に対する住宅無償提供を打ち切りました。そ

において、一方で外部者として媒介の役割の重要性を分かったうえで、現地で、または、保養のよう

に現地の外に場を作ることによって「風」を通して。今日のお話で、その活動に国際協力団体としての経験が生きていたことも確認できた。

### 「支援」が生みだす関係性

現在私自身は、保養キャンプに絞って関わりを続けている。「保養」とは、チエルノブイリ原発事故（1986年）の影響を受けたベラルーシとウクライナで、今もおこなわれている転地療養である。ベラルーシでは年間約6万人、ウクライナでは年間約5万人の子どもが、国費で汚染の少ない地域への保養（1カ月程度）を続けている。日本では国が施策しなかったため、事故後民間のボランティアが中心となり保養支援を始めた。昨年も

したい」。原発事故の加害者である政府が期限を決めた自立を強制するような発言が国や福島県からされています。福島では「多くの人が普通に着ているのだから」と！一方で、福島県で実施されている小児甲状腺検査をめぐる「甲状腺検査サポート事業」で医療費を受給した患者233人のうち77人が甲状腺がん患者である事が報告されています。

### 「自主避難者」の現状

私が事務局長を担当する「避難の協同センター」は、16年7月に設立しました。政府の避難指示が出ていない地域から避難したとして国や東電から「自主避難者」と呼ばれ、避難指示が出ている地域の住民と区別されました。強制避難者と異なり、月々10万円の精神的損害への賠償金もない。「みなし仮設住宅」としての住宅の無償提供は「唯一の公的支援」でしたが、福島県は17年3月末での無償提供打ち切りを決定。国も追認したのです。これまでに住宅支援の継続を求める交渉が何度も持たれましたが、国も福島県も方針撤回を拒んでいます。

センター設立後の2年間で150人を超える区域外避難者の住宅問題や生活問題の個別相談を受けてきました。センターの設立理由は住宅無償提供と打ち切りによ

長谷部◎今日お話を聞いていて、各現場で色んな人間関係ができて、その人たちは福島で生きていく。

その人たちが福島の声を発信できればいいが、もし代弁する必要がある。あったり場をつなぐ必要があるのであれば、大上段に反対というよりも、地元の声をそこから伝え続

年間延べ1万人近くが保養に参加したが、ボランティアな活動の限界もあり、資金・スタッフが不足し支援団体は疲弊している。

事故後の「支援」の問題は複雑



長野での保養の様子。

います。だって一切の差別心がない人なんてこの世にいないのだから」。

この言葉を聞いた時、私はときりとした。当事者のニーズに応え、善意でかつ無償で続けてきたのだから自分たちの支援活動は正しい。そんな気持ちがかどこかにあったのかもしれない。「支援」という名のもとで、そこに生じる権力関係や一人の人間として省みるべきことを、自分自身に対して隠してしまっていたことに気づいた。当事者・支援者との対話内容や保養をとりまく社会構造の問題は、拙著

り多くの避難者が経済的困窮に陥っている事がわかったからです。

避難先の山形県の実態調査の結果では、困窮・不安の第一位は「生活資金」で全体の64%を占め、身体健康が49%、住まいが40・5%と続きます。東京都の実態調査では、月収入10万円以下が22%、20万円以下の避難者世帯数が過半数を占めています。新潟県精神保健福祉協会の調査によると、同県避難者への調査で、通常は5%程度の人が抱える重度ストレスが24・8%に昇っています。ちなみに国と福島県は避難者の実態調査を拒否し続けています。

### 支援打ち切りがもたらすもの

これまでに、避難先住宅からの退去を強要されてホームレスとなった人、山梨県の山奥で孤立していた母子世帯など、様々な困難事例に直面し、支援してきました。愛知の寄せ場（日雇い労働の求人業者と求職者が集まる場所）から、片道切符で原発作業員として福島に来たものの、精神疾患を抱えているとの理由で一方的に労働契約を打ち切れられ、住居からも追い出されて郡山駅前でホームレス生活を続けていた男性もいました。忘れる事ができないのは、母子避難の末に自死した女性の事です。私と同じ年の彼女は夫からのハラスメントを受けながらも、2人の子ども

けていくことが大切なのかなと思

団体紹介  
アユース仏教国際協力ネットワーク  
宗派を超えて仏教僧侶が集まり、仏教の精神に基づいて1993年に設立された国際協力NGO。  
(http://ngo-ayus.jp/)

日本国際ボランティアセンター(JVC)  
アジア・中東・アフリカの11の国・地域および東日本大震災被災地へ活動する国際協力NGO。  
(https://www.ngo-jvc.net/)

を大学に進学させるために避難先でダブルワークを続け、子どもの大学入学決定後に疲れ果てて自死しました。彼女の遺品整理をしましたが、「テレビで大丈夫だと言っているのにお前は馬鹿だ。逃げる必要などないと夫に言われ続けた」、「家族がバラバラになってしまった。原因をつくったのは私」、「夫が怒る気持ちも分かりません。あゝ原発事故さえ無ければ…」、「私さえ放射能を気にしなければ、震災前のように暮らせたのかな」といった言葉が遺されていました。

19年3月末には収入が低い2000世帯への民間賃貸住宅家賃補助、国家公務員住宅避難者1300世帯の提供を打ち切るとしています。しかし、12月段階で20%しか住まいが決まっていけないのです。その中には病気を抱え、転居できる状態にない世帯も多くあります。福島県はそれでも「3月末で転居できない場合は2倍の家賃を請求する」と言い切ります。国策である原発事故災害から逃れた人びとが住まいを奪われます。反貧困運動の皆さんの力を借りながら「ひとりも路頭に迷わせない。二度と自死者をださない」よつ安心できる住まいを確保する為の活動を今日も続けています。■

(4/6) <http://www.aunipnet-t.org/?c=node/2342>  
<http://www.aunipnet-t.org/?c=node/2349>



斎藤博嗣&裕子／さいとう・ひろつぐ&ゆうこ  
—反百姓「じねん道」—

## 第11章 百姓を『子どもたちの憧れの仕事』ナンバーワンに！ ——国連「家族農業の10年」小農の権利宣言が教科書に載る時代にしよう

2018年11月20〜22日、東京の聖心女子大学を中心に開催された、3カ国民衆会議（日本、モザンビーク、ブラジル）に、シンポジウムのパネリスト、種の交換会、マルシェの出展で参加した。「小農は環境を維持し、地域活動を共同体で行ってきたが、生産性が低いとされ、多様な営みが正当に評価されてこなかった。これは、農家に関心を示さなかった消費者の責任も問われている。日本でも、大規模農業に補助金提供や新技術開発をする一方、小農への支援は僅かで、その権利は軽視されている」3カ国会議まとめより小農の権利が脅かされる問題の構造と解決を議論し、今後の行動計画を話し合った。

12月には、国連総会で「小農と農村で働く人々の権利宣言」が採択された。（何と！日本は棄権 泣く小農の価値を再評価し「食の権利」「種子の権利」などが明記され、小農の権利を守る都市住民の生活につながる」とした。世界規模で小農が主導した運動の成果であり、国際法が小農を尊厳ある主権者として位置づける画期的な宣言で、日本を含む国連加盟国の責務となる。先駆的特徴は、小農に「農村で働く人々」を加え、対象を農村部に暮らす人々に広げた点だ。



## ひろつぐとゆうこの 百姓の100章 A Farmer have One Hundred Stories.



2019年1月4日、日本農業新聞「家族農業の10年」魅力ある新たな価値観—ここで暮らし、育む—働き方は自分次第—という見出しで特集欄に掲載された、斎藤ファミリーの「小豆脱穀」の様子（高内杏奈記者撮影）

※「反百姓「じねん道」」の自家採種のタネは、ARL STUDIOで購入できます。

私たちの町では、駅周辺に新興住宅が建ち並び、人口激増で新小学校が建設される中、創立140年を超える農村部の小学校は次々と閉校。学校統合の対象4校のうち2校が昨年、1校が4年後に閉校、我が子が通う学校もPTAや地域住民、教育委員会の間で話し合いが続いている。隣の市には、統合せず、小規模特認校（自然豊かな環境に恵まれた小規模校に希望者が入学できる運営体制）で存続する学校もある。持続可能な開発のための教育（ESD）を推進する「ユネスコスクール」にも認定され、地域の人が交流するコミュニティスクールとして取り組んでいる。戦後最大規模の教育改革『新学習指導要領』では、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられているが、百姓はまさに地球的課題を解決する憧れの仕事として注目的になるだろう。

## Have you ever seen the Cinema? ああ映画を見たかい? — 11

『ショコラ 君がいて、僕がいる』【原題】Chocolat  
(2015年、フランス)  
【監督】ロシュディ・ゼム 【出演】オマール・シー、ジェーム・ステイレ



© 2016 Gaumont / Mandarin Cinema / Korokoro / M6 Films  
『ショコラ 君がいて、僕がいる』  
発売元：TOエンタテインメント  
販売元：TOエンタテインメント  
その他：提供：東北新社、STAR CHANNEL MOVIES

20世紀初頭、フランスで活躍した実在の黒人道化師の半生を描く。どさ回りのサーカス団（というより見世物小屋）に所属するこの男は、カナンガという芸名で凶暴で野蛮な人喰い土人を演じていた。ある日、ベテラン道化師・フティット（白人）と出会い、お笑いコンビを組むことになる。芸名も道化師らしく「ショコラ」と改める。白黒コンビの珍しさも相俟って、彼らは瞬く間に人気者に。やがてパリの名門劇団にスカウトされる。富と名声を得た彼だが……。

二人の定番のネタは、「どつき漫才」。白人のフティットが黒人のショコラをどつきまわし（＝調教）、そこでショコラが滑稽なりアクシオンをして観客の笑いを取る。広告で描かれたショコラの姿は、猿。黒人↓アフリカ↓未開↓野蛮↓劣等人種という偏見、そして白人優位思考がその笑いを生み出す。数多くの人びとの努力にもかかわらず、今なお、この偏見・差別は根強い。

な「ゲイシャ」に扮する。着物を着て、日本髪のカツラをかぶり、白塗りをして、日本人の目から見れば、やはりおかしい。

外国（特に欧米）のコメディなどでサムライ、ニンジャ、ヨヅナ等々を見かけることがあるが、多くはヘンテコなステレオタイプにはまり、そのヘンテコが笑いにされている。また、漫画や風刺画で描かれる日本人の典型は、つり目にメガネ、出っ歯、おまけに男ならチビ、小太り、ハゲ。ここにも偏見と白人至上主義がある。「ジャップ」や「チョッパリ」「小日本人」というあからさまな侮蔑表現に出会うこともある。

こつた自らに向けられた差別に出会ったとき、どのように対応するのが正しいのか？ 差別者を特定し、公然の場に引きずり出し、糾弾し、謝罪させるべきなのか？

筆者はどうにも戸惑うところだ。訂正と正しい認識を求めることは当然であるが、過剰な抗議は反動を生み、さらなる軋轢を作り出すだけだ。また、他者に向けた刃は必ず自らにも返ってくる。どんなに聡明で高潔な人物でも、無知がもたらす偏見・差別から自由ではられない。とりわけ愚かな筆者はもちろんなので、戸惑いは増すばかりだ……。

## Topics

01

## フィリピン

## 開発と超法規的殺害

勅使川原香世子／てしがわら・かよこ

明治学院大学国際平和研究所研究員

フィリピン・ミンダナオ島の「スミフル」バナナのプランテーションで2018年10月、ストライキが起きた。ストライキ開始後、組合員1人が殺害され、2人が銃で撃たれ重傷、組合代表の自宅や組合事務所などが放火され全焼するといった事件が相次いでいる。これらの事件と労働争議との因果関係の明確化は困難だが、フィリピンの農村・漁村地域では、不正に抗う人びとが国軍や警察の標的にされる現実は今も周知のことである。

かわならず、「怠惰で無学だから貧困から抜け出せないのだ」と差別され虐げられてきた。

1974年に聖フランシスコ会によって東ネグロス州の山間に設立されたマウンテン・クリニックは、生存基盤の改善、尊厳の回復を目指して農民組織とともに活動してきた。しかし、農民や漁民を組織化する彼らの活動は国軍の恰好の標的



超法規的殺害への抗議デモ。西ネグロス州バコロド市にて。（撮影：筆者）

さらなる暴力の応酬

17年5月のミンダナオ島への戒厳令布告に続き、18年11月、ネグロス島などにも非常事態宣言が布告され、国軍兵士と警察官が増員された。その後、113人に武器不法所持の捜査令状が出されており、一節によると、捜査の際に東ネグロス州ギフルガン市内で7人が殺害され、激化した国軍の作戦のために村外へ避難せざるを得なくなった農民が続出して

とされた。例えば、2005年、クリニックの中心メンバー3人が滞在していた家屋が国軍によって四方八方から銃撃された。サバイバーの1人は、17年に再度、至近距離から撃たれそうになり移住を余儀なくされた。現在、5人ほどのクリニック関係者が、国軍や警察の殺害標的リストの中に実名を挙げられている。

さらに、農民や漁民を外から支える人びとへの弾圧も強化されている。たとえば、17年11月、東ネグロス州バヤワン市で人権侵害に関する現地調査のために移動中だった人権活動家3人が撃たれ、うち2人が亡くなった。続いて18年11月、人権派弁護士ベンヤミン・タルグ・ラモスが殺害された。ドゥテルテ政権下、弁護士として34人目の犠牲者である。

度重なる脅迫や殺人などが人びとに恐怖心を植え付け、多くの人が、不正に抗い声を上げる人に近づくことさえも躊躇するようになっていく。

## 私たち日本人は無関係なのか？

日本人の多くは、フィリピンにおける人権侵害を同国の国内問題としてとらえがちである。だが実際、EJKの主犯と想定される人びとが責任に問われることのない不処罰の構造を、私たち日本人が支えているといっても過言ではない。ハリナ41号で特集された「甘い」果実の苦い真実」からも明らかのように、日本企業の利益や私たちが消費する安価なバナナは、不正な社会経済的構造や不処罰の文化に支えられた国家による市民弾圧を利用して、生み出されているからだ。

私たちが暴力を容認し、あるいは利用し続ける限り、この不処罰の構造は温存され、一部の人びとの利益のために市民弾圧は続けられるのである。■

（注）詳細は「カルバナナ キャンペーン」のホームページ（<https://www.e-banana.info/>）を参照

国軍や警察による市民弾圧と市民の分断

農民や漁民などは不正な社会経済的構造によって貧困から抜け出せないにも



# 韓国で発展、 拡大する民衆交易

キム・ジエギウム

民衆の公正交易協同組合 (Peoples Fair Trade Coop) 理事長

アン・ミンジ

民衆の公正交易協同組合 (Peoples Fair Trade Coop) 生産地コーディネーター

## 2

017年12月、大学生協、ドゥレ生協、ハンサリム生協、幸福中心生協という韓国の4つの生活協同組合連合会は、民衆交易のための協同組合「民衆の公正交易協同組合」(People's Fair Trade Coop、以下PTコープ)を設立しました。ドゥレ生協はすでに10年以上前から民衆交易をおこなっており、貿易業務や生産地とのコミュニケーションを担当する



バランゴンバナナの出荷団体代表(右)が生協の店舗を訪問。

子会社として04年に「APNet」を立ち上げています。幸福中心生協もフェアトレード商品を扱っており、ハンサリム生協も17年からマスコバド糖の取り扱いを始めました。このように各生協が独自に進めてきたフェアトレード・民衆交易品の取り扱いを、協同組合間でさらに推し進めることを目的として、大学生協連合会も加わって4つの生協と職員が一緒に参加する「多重利害関係者協同組合」としてPTコープが発足した訳です。

### はじめはマスコバド糖

現在、PTコープの商品はオルター・トレード・ジャパン(ATOJ)も取り扱っているマスコバド糖、バランゴンバナナ、コーヒー(東ティモール、ラオス、ペルー)、オリーブオイルが主ですが、他にコショウやアーモンドも扱っています。なかでもマスコバド糖は韓国に初めて紹介された民衆交易品だけに、組合員の愛情もいっそう深い商

品です。04年の13トンの輸入から始まり、18年現在では250トンを超える量を組合員に供給しています。その年間の消費量の半分は梅の収穫期である6月に集中しています。梅の収穫期に韓国伝統の梅シロップをマスコバド糖で漬ける組合員が少なくないからです。

一方、ドゥレ生協がバランゴンバナナの交易を始めることは決して容易ではありませんでした。

韓国の生協には「国内農業を保護し、食料の自給率を高める」という原則があり、バナナの取り扱いが国産の果物の消費量を減らすことを懸念する組合員がいたからです。しかし17年、ドゥレ生協の組合員理事たちがミンダナオ島とパナイ島のバランゴン生産地を訪問し、農民が農地を手にするために闘い、持続的な農業をめざして苦勞している姿を見ました。ドゥレ生協組合員たちは、連帯を通じて国内の農業を保護するという共通の課題をより堅固に取り組めることを確認し、バランゴンバナナの手取り扱いを承認しました。

### 出会うことで深めたお互いの理解

PTコープでは、民衆交易品の生産地を直接訪問し、生産者と消費者がお互いをより深く理解する交流事業の機会を設けています。18年には3つの生協から41人の組合員がフィリピンのネグロス島を訪問しました。サトウキビ生産者やマスコバド糖の製糖工場、バランゴンバナナの手取り地やパッキングセンター、そして生産者支援と輸出を担うオルタートレード・フィリピン社(ATOJ)を訪問し、商品に対する理



ドゥレ生協の交流プログラムの様子(2017年)。

解をいっそう深めることになりました。訪問前は民衆交易を頭だけで理解していた参加者が、帰国する頃には生産者の生活を心に刻んだ姿が見られました。ネグロスの生産者も組合員との交流を通じて、韓国の農民が直面している問題や暮らしが自分たちと多くの点で似ていることを知り、とても驚いていました。交流後、参加者の意識から実践へつながることが重要だと判断し、今年からはフォローアップの活動として民衆交易を伝えられる人材を各生協で養成する講座などを計画しています。

### 生協による民衆交易の独自性

最近フェアトレードのキャンペーンなどが韓国で毎年展開され、一般市民もその意味を共有しています。フェアトレード(韓国では「公正貿易」と呼ぶ・民衆交易を展開する団体が集まって「韓国公正貿易協議会」を発足し、PTコープも正会員団体として参加し、様々な懸案を議論しています。PTコープは、韓国内のフェアトレード運動の中で唯一、生産者と消費者が連帯する民衆交易の考え方で交流を進めている団体です。韓国のフェアトレードの取引規模は500億ウォン(約50億円)程度と推定されており、PTコープが韓国で占める売上高のシェアは決して大きくはありません(約4%)。しかし、生産者の生活の自立を考えた消費を進



ハンサリム生協の交流プログラムの様子(2018年)。

産者と直接会うなかで、生協がこれまでしてきた産直取引の意義と民衆交易はまったく同じことだということを知りました。

PTコープは、組合員生協の民衆交易品を増やし、利用拡大を進めていきたいと思っています。まだ商品取扱いや交流を開始できていないインドネシアの



できあがったアイスを受けるジミーさん。

### カカオキタでの 甘く幸福な時間

義村浩司／よしむら・ひろし  
(株)オルター・トレード・ジャパン 商品四課

「サルモンさん、美味しそうなものを食べてるね！」カカオキタの宿舎兼オフィスで、朝起きたらサルモンさんが甘いココアにパンを浸して食べていた(カカオのふるさとの南米の朝の食卓みたい)。宿舎の主のアキコさん曰く、「彼はこうして食べるのが大好きなの！しかもこのココアは彼の育てたカカオから作ったパプア産のもの」。ちょっと横取りして味見する。パンに染み込んだココアの風味が口に広がる。おいしい！

カカオキタの宿舎兼オフィスは小規模のチョコレート工房も兼ねている。いつもはクライス村でカカオを育てているサルモンさん。チョコレートアイスを作るためのカカオマス(カカオ豆を焙煎して殻をとりすり潰したカカオのペースト)がなくなると、村からでてきてカカオキタの宿舎兼オフィスに泊まり、翌朝カカオ豆を焙煎、粉碎して殻を取り除き、卓上石臼で磨り潰してカカオマスを作る。新鮮なカカオ豆で作ったカカオマスは森のフルーツの香りがする。カカオキタのアイスは口コミだけで1日50個くらい売れている。サルモンさんのカカオマスに粉乳と水と卵と砂糖を加えて熱してアイスミックスを作り、冷凍庫でひと晩凍らせて練っただけのシンプルなもの。カカオキタのアイス工房&カフェの中心メンバーのひとりジミーが生協の寄付で届いたジェラートマシンにアイスミックスを入れてスイッチを入れる。30分くらい練っているとアイスが固まり始める。手作りもよいがジミーが機械で作ったアイスは甘くて柔らかくカカオの風味にあふれている。試作品を口に含んだみんなに笑顔が広がる。



先日フィリピン担当の寺田が、KF- RC が学校菜園のプログラムを手伝っている地域の小学校を訪問した際、なかなか子どもたちの自主的参加がないことを先生たちと話し合っているとき「畑で作業するのは農民＝労働者（サトウキビ農園労働者）と同じで、勉強するために学校へ通わせてるのにわざわざ畑の作業をさせないでくれ」という親が多いという話を聞いたとのこと。今世界では、エディブル教育や食育が先駆的に進められている話を伝え、校長先生は理解を示してくれたそうですが、農民に対する価値観の転換が必要であることを痛感したそうです。

日本でもフィリピンでも、農村や農民のイメージや価値が低くみられることがあります。今こそ転換期であり、私たちが両方の現場でそれを進めていきたいものだと思います。じねん道さんのコラムのタイトルにもあるように、百姓が子どもたちの憧れのの仕事になるような日をめざして！（吉澤）

今号のTOPICSでも触れられていますが、スミフルブランドのバナナを生産しているフィリピン・ミンダナオ島の農園の労働者たちが、正規雇用や待遇改善を求めて命がけの行動を続けています。残念ながら日本のマスメディアではほとんど取り上げられていませんが、スミフルに責任ある対応を求めるために、昨年11月に要請書を送付しました。しかしながらスミフルからの反応がないため、年が明けて1月22日、東京・渋谷区にあるスミフルジャパン本社前で緊急アクションをおこないました。自社ホームページで「現地の人たちとパートナーシップを大切に、徹底した品質管理を進めていく」とアピールしているスミフル。その言葉を現実のものにしてもらいたい、と切に願います。（野川）

## ハリーナ

2019年3月号 vol.02-no.42  
2019年3月1日発行

【編集者】  
吉澤真満子  
野川未央

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)  
〒169-0072  
東京都新宿区大久保 2-4-15  
サンライズ新宿 3F  
(tel.) 03-5273-8160  
(fax.) 03-5273-8667  
(e-mail) info@apla.jp  
(URL) https://www.apla.jp

【印刷】  
有限会社だいもん印刷

## 事務局だより

### 事務局の動き (2018年11月～2019年2月)

|                    |                                                                                                                                                                                                     |
|--------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10月 30日～<br>11月 2日 | グリーンコープ fromネグロスセミナーが開催され、ネグロス島のオルタートレード・フィリピン財団(ATPF)からのゲスト3名と、グリーンコープ生協くもと、グリーンコープ生協やまぐと、グリーンコープ生協みやざき、グリーンコープ生協おかやま、グリーンコープ生協ひょうご、グリーンコープ生協おおさか、グリーンコープ生協ふくおか、グリーンコープ生協おいた、グリーンコープ生協(島根)を訪問しました。 |
| 11月 10日            | 二本松有機農業研究会・ソーラーシェアリング完成式に参加しました。                                                                                                                                                                    |
| 11月 11日            | 「しあわせの経済」フォーラム2018のマルシェに出店しました。                                                                                                                                                                     |
| 11月 12日            | パルシステム埼玉(三郷)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                       |
| 11月 14日            | 獨協大学の授業で野川が講演しました。                                                                                                                                                                                  |
| 11月 16日            | パルシステム東京(板橋)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                       |
| 11月 16日            | りそねアジア・オセアニア財団第2回環境事業ワークショップに野川が参加しました。                                                                                                                                                             |
| 11月 18日            | 有機農業映画祭の販売ブースに出店しました。                                                                                                                                                                               |
| 11月 21日            | (日本・ブラジル・モザンビーク)3カ国民衆会議のマルシェに出店しました。                                                                                                                                                                |
| 11月 23日            | パルシステムグループ市民活動助成団体の実践報告・交流会に参加しました。                                                                                                                                                                 |
| 11月 25日            | 「知らなかった! アジアンコーヒー入門」を共催しました。                                                                                                                                                                        |
| 11月 26日、<br>27日    | BMW技術全国交流会に寺田が参加しました。                                                                                                                                                                               |
| 11月 28日            | グリーンコープ生協とつとりで、fromネグロスセミナーが開催されました。                                                                                                                                                                |
| 12月 1日             | 第1回フェアトレードフェスタ川口に出店しました。                                                                                                                                                                            |
| 12月 6日～<br>17日     | フィリピンへ寺田が出張しました。                                                                                                                                                                                    |
| 12月 9日             | 埼玉県高等学校教職員組合で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                       |
| 12月 10日            | パルシステム埼玉(熊谷)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                       |
| 12月 17日            | BMW技術交流会・若手幹事会に吉澤が参加しました。                                                                                                                                                                           |
| 1月 12日             | WE21相模原にて、東ティモールの活動報告会に野川が参加しました。                                                                                                                                                                   |
| 1月 12日             | 武蔵大学の授業で寺田が講演しました。                                                                                                                                                                                  |
| 1月 21日             | パルシステム東京(猿江)で「コーヒーの淹れ方講座」を開催しました。                                                                                                                                                                   |
| 1月 24日             | パルシステム神奈川(ゆめコープ)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                   |
| 1月 29日             | パルシステム埼玉(北川口)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                      |
| 1月 31日             | パルシステム東京(八王子さくら食育委員会)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                              |
| 1月 31日             | アーユス・ティ(アーユス新人賞受賞式)に出席しました。                                                                                                                                                                         |
| 2月 2日              | 日本大学国際関係学部福岡ゼミ(中高大連携)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                              |
| 2月 2日              | 新宿未来創造財団・新宿文化センターで「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                  |
| 2月 3日              | リサイクル千歳台で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                           |
| 2月 5日              | 東京学芸大学附属高等学校・社会見学実習で吉澤、寺田が講演しました。                                                                                                                                                                   |
| 2月 6日              | パルシステム埼玉(川越東)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                      |
| 2月 9日              | 東京西早稲田・感通寺で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催、PtoPカフェの出店もしました。                                                                                                                                             |
| 2月 9日              | 新宿エコギャラリーで「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                          |
| 2月 9日              | 神奈川県松田町・まつだ国際化推進フォーラム主催「2020年代の世界とMATSUDA」で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                         |
| 2月 13日             | パルシステム東京(調布西)で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。                                                                                                                                                      |
| 2月 6日～<br>17日      | ラオスに野川が出張しました。                                                                                                                                                                                      |
| 2月 18日、<br>19日     | 第18回BMW技術基礎セミナーに吉澤、寺田が参加しました。                                                                                                                                                                       |
| 2月 23日             | APLA理事会・評議員会開催                                                                                                                                                                                      |

### 事務局からお知らせ

#### 以下の呼びかけに賛同・協力しました。

- 3カ国民衆会議・国際シンポジウム
- 住友商事・スミフル・ジャパンへの要望書(フィリピン・ミンダナオ島スミフルバナナプランテーション労働者の統撃を受けて)

#### ★『ハリーナ』のバックナンバーがウェブサイトでもご覧いただけます。

最新号発行に合わせて前号を掲載しています。「ハリーナ」を紹介くださる時などにご活用ください。  
<http://www.apla.jp/archives/publications>



2018年9月から、ネグロス島の若者4人がカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)で順次研修を開始し、農場に住み込みで循環型農業を学んでいます。今回も個性豊かな研修生たち。それぞれの個性が伸びていくようスタッフも試行錯誤を繰り返しながら研修を進めています。



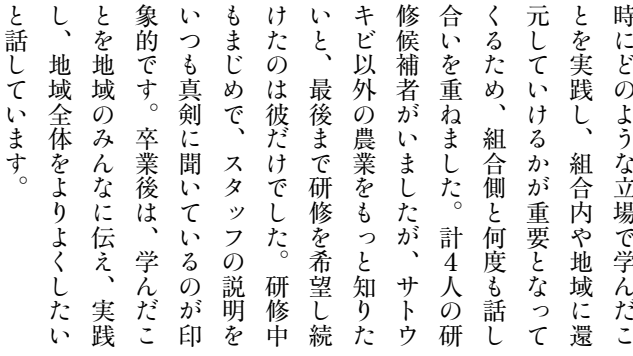
しかし、小さな畑にはいんげん、カボチャ、ゴーヤ、バナナなどを植えていて、研修に来てからも特に野菜の栽培についてさらに知りたいと意欲たっぷりです。



家族は1haくらいの土地で営農をしていて、カボチャ、オクラ、バナナ、コーヒーなどを栽培しています。なんと15人兄弟。養豚に興味を持っていて、卒業後は有畜複合の循環型農業を実践しながら、家族や地域の農民に学んだことを伝えたい、家族の農業を助けたいと意気込んでいます。



18年、日本の高校生とネグロスの若者が1週間共に生活し、ワークショップを通じてお互いの文化や自分のことを考える「グリーンコープ青少年ネグロ



研修中は、研修生一人ひとりが、好きなように作物栽培を実践してよい区画が与えられます。それぞれが育ててみたい作物を植え、収穫後に販売した野菜の売り上げは、一時的にKF-RCが預かって、卒業後に初期投資として本人に渡します。面白いのは、畑にも個性が出ること。綺麗に畝や棚を作って栽培している人、苗と苗の間隔がバラバラで計画して栽培されていないように見えても収量が高い人、人と違った作物を育てて楽しんでいる人。こうした畑を見て一口に農業とはいえ、野菜、家畜、果物など、それぞれ向き不向きの分野があり、誰にでも同じ研修内容や卒業後のサポートでは上手くないのかなのだな、ということを感じます。



# KITCHEN APLA

キッチンあぷら

Featuring **カカオ**

レシピ提供・料理

大久保ふみ／おおくぼ・ふみ  
APLA事務局



## カカオマフィン

パプア州産のココアパウダーでつくる、混ぜて焼くだけの簡単おやつ。  
バターに加えてオリーブオイルを使っています。

### 材 料 (マフィン型10～12個分)

ホットケーキミックス… 200g  
ココアパウダー(●) … 50g  
牛乳… 100cc  
マスコバド糖(●) … 80g  
パレスチナのオリーブオイル(●) … 35cc  
バター… 35g  
卵… 2個  
カカオニブ(●) … お好みで(なくても可)

### 作り方

- [下準備] オーブンは180℃に予熱しておく。
- [1] ホットケーキミックスにカカオパウダー、マスコバド糖、オリーブオイル、バター、溶いた卵を入れて、よく混ぜる。
- [2] [1]に牛乳を数回に分けてボールのまわりから加え混ぜる(冬など乾燥している時期は更に大さじ1加えてもOK)。
- [3] マフィン型に等分して入れ、お好みでカカオニブをトッピングする。オープン天板に少し間隔を空けるようにして並べ、中段で20～25分焼く。



ココアパウダー



カカオニブ

(●)印の付いた材料は、オンラインショップAPLA SHOPにてご購入いただけます。  
<http://www.aplashop.jp/>



## ハリーナ HALINA

2019年3月号 vol.02-no.42 2019年3月1日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F

〈tel.〉03-5273-8160 〈fax.〉03-5273-8667 〈e-mail〉info@apla.jp

〈URL〉<https://www.apla.jp>

### APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって  
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

#### 問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。  
QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

